

路線違えど 人間的成長求め

監督の選択

自由と規律

下

大崎

監督が自由路線を推し進めているチームもある。大崎は、21年秋に野球部の監督に就任した綿引良宏(54)が、次々とルールを緩くした。

—他の部活との兼部もOK
—勉強に専念したい場合は休部も可

結果、部員は急増し51人に。「部員が増えれば、競争が自然と生まれて全体の力が上がる」と綿引は狙いを語る。自由度を高めた一方、選手に「自らが考えて自分から動く」という姿勢を求めた。

主将の熊谷匠(3年)が入部して驚いたのが、「監督ではなく、主将や副主将が練習メニューを考えること」だった。さ

らに、試合中は基本的に「ノーサイン」で、プレーの判断は選手たちがしていた。綿引は「自分で考えることで、成功した時の達成感が生まれる」。

主体性を重んじる背景には、綿引の会社員時代の思いがある。監督になる前の22年間、大手損保の営業社員だった。営業の数字を追いかける日々。目の当たりにしたのは、どんなに真面目でも指示を待ち、命じられたことだけする人は行き詰まり、成績を落としていく。そんな現実だったという。

14年に都立高の保健体育科の教員に転職。ルールで縛って自由に考える機会を選手たちから奪うことは、「思考停止」につながるかねないと、自由路線を目指した。

「社会に出ても自分で問題解決できる自信をつけてほしい」と綿引。選手が卒業した時に「監督には何も教わらなかった」と思わせることが目標だという。 〓敬称略